

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：26201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K10514

研究課題名（和文）軽度認知症の人の自己コントロールを高める看護支援プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a nursing support program to improve self-control in people with early-stage dementia

研究代表者

土岐 弘美 (Toki, Hiromi)

香川県立保健医療大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：40314926

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、軽度認知症の人が捉えている自己に注目し、『軽度認知症の人の自己』を明らかにすることである。そして明らかになった自己をもとに自己コントロールを高める看護支援を考察し、看護支援プログラム（案）を構築することである。軽度認知症の人の語りから、『連続性を保つ自己』が自己コントロール感を高めるために重要であることが明らかになった。《連続性を保つ自己》は、時間性のなかで自ら過去と繋がり、自己や他者との相互作用の中で自己を再獲得していた。そしてそれは、自己の連続性を保つことを強化し、存在感や安心感を高め、認知症とともに自分らしく日常を懸命に生きる活力となっていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

認知症の人の体験は歴史的に長い間無視され、困惑、葛藤しながら自己を保ち、新しい力を獲得していることが手記から読み取れるが、その現象は明らかにされておらず、自己に焦点をあてた支援も未開拓な状況であった。したがって認知症の人の語りから、とらえる自己を明らかにした本研究は、認知症の人の世界にさらに寄り添った新たな基礎的な知見になる。さらに支援者が困難とする自己の喪失と関連して生じる行動・心理症状の理解や改善、予防の手がかりになる。また看護支援プログラムは、認知症の人の自己コントロールを高め、病状の進行と共に新たな世界でも自分らしく生きていく過程を支えることに貢献する先駆的で独創的な研究と考える。

研究成果の概要（英文）：From episodes collected from people with early-stage dementia, it has become clear that a "The continuity-maintaining self" is important for increasing a sense of self-control. The continuity-maintaining self is necessary for maintaining a sense of self for those in the early stages of dementia and individuals regained a sense of self by making temporal connections to the past by themselves and through interactions with others. In this way, in order to increase the sense of self-control in people with mild dementia, it is important to be supported by a presence that connects and fills in the past, present, and very near future within temporality, and also one that connects and fills in the future. It has become clear that nursing support is important in helping people live assisted lives, while creating their own worlds based on their own interpretations, and connecting their past and present.

研究分野：高齢者看護学および地域看護学関連

キーワード：軽度認知症 自己 自己コントロール 看護支援

1. 研究開始当初の背景

世界の認知症患者の数が、2015年から2050年には約3倍の1億3,150万人に増加すると推定され、主要7カ国、世界保健機構や世界認知症評議会も認知症やその予備群となった人をどう支えるか国家レベルで検討している(WAR, 2015)。日本においても2025年には約700万人に増加すると推定している。少子高齢化社会が進む中、認知症の有病者数の増大とともに認知症医療や支援の整備は急務とされている。認知症の各段階において、認知症の人が自立性を保つことができる最も効果的な支援を検討することが最優先課題である(Kelly, S, 2015)。

認知症の人が自己を失う体験に強い葛藤を抱き、病状の進行と共に新たな世界の中で生きている(阿保, 2011)。認知症の人の手記からも、徐々に自らをコントロールする力を失う体験と沸き起こる感情が語られている。しかし認知症の人がとらえる自己コントロールは何か、自己コントロールの喪失に伴いどのような感情を抱いているのかは明らかにされておらず、その看護支援も具体的に示されていない。また沸き起こる感情は、行動・心理症状の発現に影響を与えると考えられているが、その看護支援も具体的に示されていない。

英国では「The dementia guide」が、またオーストラリアでは、診断後に受講する当事者プログラムとして「Living with memory loss」が連邦政府の支援のもと各8州で実施されている。これは当事者が認知症の診断後、心理的葛藤や日常生活の中で、自己コントロールを行いながらその人らしい生活を継続する力を養う手助けとなっている。日本ではこのような支援報告は見当たらず、未開拓な状態である。近年、認知症症状が気になれば早期に受診をし、治療を開始するという情報は一般的になった。しかし、受診後や軽度認知症の人が、自分に何が生じているか、また生じる状況をどう予測し、自己コントロールすれば、日常生活を自ら選択し、自分らしい生活を継続していくことができるのか等の情報は非常に乏しい。また厚生労働省は、2025年を目途に住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域包括ケアシステムの構築を目指している。認知症の人においても自らの選択により自立した生活が継続できる看護支援が必要である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、軽度認知症の人が捉えている自己に注目し、『軽度認知症の人の自己』を明らかにすることである。そして明らかになった自己をもとに自己コントロールを高める看護支援を考察し、看護支援プログラム(案)を構築することである。

3. 研究の方法

認知症の人がとらえる自己に焦点をあて、今後の課題を検討することを目的とし、文献検討を行った。次に質的帰納的研究方法を用い、認知症の診断後、地域生活を継続している15名の研究協力者に半構造化面接を行い、軽度認知症の人がとらえる自己を明らかにした。そして明らかになった5つの自己を支える視点を反映した看護支援プログラム(案)を作成した。

4. 研究成果

文献検討の結果をもとに、インタビューガイドを作成し、半構造化面接によってデータを収集し、質的分析を行うことで、軽度認知症の人の語りからみる自己の5つのとらえを明らかにした。以下に5つの自己について説明する。

《縮小する自己》は、認知症の影響や外的・内的なスティグマによって尊厳を踏みにじられる『蔑ろにされる自己』、拒絶され、さらに傷つけられないように自ら身を守り『閉ざしていく自己』となることで、自らの尊厳を守るために安全な狭められた世界の中で生きる自己をとらえていた。

《心やすまらない自己》は、認知症と診断を受け、身体、心理、社会的側面における体験によって湧きあがるネガティブな思考や観念を頭から拭い去ることができない『心やすまらない自己』となり、日常生活の中でその苦悩を手放すことができず、苦悩とともに心やすまらず生きる自己をとらえていた。

《遊離する自己》は、認知障害や認知症の症状の影響により過去、現在、少し先の未来において、繋がりを保ち、維持することが難しくなり『ずれてくる自己』や『統制がとれない自己』になることによって、バラバラに遊離しそうな恐怖感に駆り立てられ、基本的前提である生をも脅かされる自己をとらえていた。

《知恵を活用する自己》は、時には『抗い奮起する自己』となり、時には苦悩しながら生き続けることから離れ、今をしっかりと生きていくために、曖昧な不確実性ととも生きる『やり過ぎる自己』となることで、人生の中で獲得してきた知恵を総動員して懸命に活用する自己をとらえていた。

《連続性を保つ自己》は、自己の繋がりを保つことが難しい状況にありながらも、自らで過去、現在、近い未来について、繋がりを保ち、そして繋がりを保つことが困難な時には、他者との相互作用の中で、補完されることで『連続性を保つ自己』となることで、不安を回避し安心して生

きる自己をとらえていた。

以上の5つの自己の特徴を示し、自己のコントロールを高める看護支援について検討した。そして《連続性を保つ自己》が自己コントロール感を高めるために重要であることが明らかになった。連続性を保つ自己は、時間性のなかで自ら過去と繋がり、自己や他者との相互作用の中で自己を再獲得していた。そしてそれは、自己の連続性を保つことを強化し、存在感や安心感を高め、認知症とともに自分らしく日常を懸命に生きる活力となっていた。

看護支援プログラム(案)は、5つの自己を支える視点が反映されている。そして「他者との相互作用によって鮮明に形成・再形成しようとする自己」、「留まり続ける苦悩を手放し解放されることを助ける自己」、「持続性の信頼を高め、認知症とともに自分らしく生きることを支える自己」を支えることに焦点が当てられている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 土岐 弘美、田井 雅子、野嶋 佐由美	4. 巻 31
2. 論文標題 軽度認知症の人の語りからみる自己のとらえ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本精神保健看護学会誌	6. 最初と最後の頁 48～57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20719/japmhn.31.22-013	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Toki Hiromi、Tai Masako、Nojima Sayumi	4. 巻 31
2. 論文標題 Maintaining Continuity of Self as Perceived by People in the Early Stages of Dementia: A Qualitative Study	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Florence Nightingale Journal of Nursing	6. 最初と最後の頁 56-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5152/FNJV.2023.22115	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 土岐弘美	4. 巻 14
2. 論文標題 Dementia Australiaによる認知症の人への支援活動 ―診断後の軽度認知症の人の支援について考える―	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 香川県立保健医療大学雑誌	6. 最初と最後の頁 43-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 土岐弘美 田井雅子 野嶋佐由美	4. 巻 18(2)
2. 論文標題 認知症の人が捉える自己に関する文献検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本認知症ケア学会誌	6. 最初と最後の頁 495-505
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田井 雅子 (TAI MASAKO) (50381413)	高知県立大学・看護学部・教授 (26401)	
研究分担者	野嶋 佐由美 (NOJIMA SAYUMI) (00172792)	高知県立大学・看護学部・特任教授 (26401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------